ひとつの安堵

鎌田昭洋

私の母は、今年九十一歳になり、介護保険でいう要介護３の認定を受けています。十年ほど前から滋賀県草津市に住む弟家族と同居していたのですが、昨年春、弟が病死。その際、弟の妻は母がいる前で「おばあちゃん（義母）は血も繋がっていない他人だから、もう面倒は見ない」と。

マンションが苦手の母でしたが、私は長岡京市の我がマンションに引き取りました。母に対して、妻は一生懸命世話をしてくれてはいるのですが、良い関係はなかなかできません。

一方、私は五年後くらいに冠動脈の再手術の予定があります。五年前の冠動脈バイパス手術で、バイパス血管に足の静脈を使いましたが、静脈は、動

脈ほど丈夫ではなく、動脈として使うと、一般には十年ほどしか持たないからです。その翌年に大腸ガン、翌々年に胃ガンも見つかり手術しましたが、ともに再発の可能性はまだまだあります。

でも、母は、足が弱ってきてはいるけれど健康で元気。私が母より先にこの世を去る可能性は十分あります。そうなれば、そして入院した場合も、母をどうするかで妻と義妹がもめ、母が辛い思いをする…。このことが一番の心配ごとになっていきました。

母が同居し始めたとき、デイサービス（週四～五日）と、妻の骨休みのためのショートステイに加えて、特別養護老人ホーム入居も申し込みました。同ホームへの入居を待つ人が相当数おられると聞いたからです。母が生きているうちに入居できるかどうか分からないが、とりあえず…と。

ところが、今年四月、同ホームから「空きが出ました。入居の可否を判断する面接をうけますか？」との連絡が。まさに想定外でした。そのとき「母

はまだ元気だし、入居させる時期はまだ…」と「入居待ちの人が多いから、今入居しないと今後入る機会がなくなるかもしれない」という二つの思いを持ちました。そこで『男の居場所』の会」の、そういった施設に関わる人たちに相談したところ、とにかく面接だけは受けた方が良いとのこと。母も納得してくれたので、面接を受け、母に一泊の体験宿泊もさせました。

結果は、入居決定。個室であるとはいえ、他人との共同生活になるので、母にとっては精神的に大変なことだと思いました。が、ショートステイやデイサービスに行っていたためか、思いのほか早くホームに慣れたようです。

いろいろな思いが交錯した母の入居でしたが、ホスピスまで行うこのホームに母を託すことによって、私の一番の心配ごとは、基本的には解決したかな、と思っています。

とはいえ、子が親を見送るのが自然な姿でしょう。そうなれるよう、自分の身体をきちんと管理していくのも、真の親孝行になると思っています。